

近世前期漢学者筆跡資料五点

― 羅山・活所・三竹・遯庵・若水 ―

伊藤 善隆^a

^a 湘北短期大学総合ビジネス学科

【キーワード】

漢文学 近世前期 林羅山 那波活所 野間三竹 宇都宮遯庵 稲生若水

はじめに

最近偶目し得た近世前期の漢学者筆跡資料五点（個人蔵）を紹介する。屏風から剥がしたものと、現在はいずれもマクリの状態となっている。どれも傷みが激しいが、図版とともに紹介することとしたい。

一、林羅山

中秋雨 道春

只合月前為詠觴 只月前に合ひて 詠觴を為す
何圖此夕雨浪々 何ぞ図らん此の夕雨浪々たるを
病中窓暗嫦娥葉 病中窓暗し嫦娥の葉

未借刀圭一寸光 未だ借らず刀圭一寸の光

○七言絶句（縦二八・五cm×横九・二cm）

○韻字：觴・浪・光（下平声七陽）

○『林羅山詩集』卷第二十三に所収。題下注に「時臥病（時に病に臥す）」とあり、左注に「元和五年」と年記がある。

○林羅山（天正十一年・一五八三〜明暦三年一六五七）江戸初期の儒学者。京都四条新町に生れる。名は信勝、通称は又三郎、道号は道春、また羅浮子、胡蝶洞、梅花村、夕顔巷などと称した。文禄四年（一五九五）、十三歳で建仁寺に入り、古澗慈積・英甫永雄に学ぶが、十五歳で寺を出て帰宅。その後、朱子学に関心を深め、慶長八年（一六〇三）、『論語集注』の公開講義を行う。慶長九年、藤原惺窩に入門。慶長十年、二条城で徳川家康に、同十二年、江戸で將軍徳川秀忠に拝謁。以後、秀忠・家光・家綱に仕えた。寛永六年（一六二九）、民部卿法印となり、翌七年、上野忍岡に土地を与えられ文庫・学問所を開き、同九年、尾張藩主徳川義直より聖堂を寄進された。明暦三年正月、明暦の大火により文庫を焼失。その失意からか、火災の四日後に病歿した。経学のみならず、多方面に大きな足跡を残し、幕府儒官として林家の学を確立した。

二、那波活所

自負之何々即席 自負之何々即席

書千光寺壁 千光寺の壁に書す

此處知何處 此の處何處なるかを知る
初遊忘復還 初て遊び復た還ることを忘る
碧潭蟠り大井 碧潭大井に蟠り

緑樹対亀山

緑樹 亀山に対す

睿嶽画屏列

睿嶽 屏列を画き

平安眉睫間

平安 眉睫の間

登高心更別

高きに登れば、心更に別たり

因念一訂頑

因りて念ず一訂頑

道圓

○五言律詩（縦一六、七cm×横二七、三cm）

○韻字：還・山・間・頑（上平声十五刪）

○『活所遺稿』卷之一に「書千光寺壁」と題して収録。

○千光寺…京都嵐山の寺。もと清涼寺の西方中院にあったが、慶長

十九年（一六一四）、角倉了以によつて嵐山に移された。嵐山大

悲閣として一般に知られる。

○訂頑…宋の張載が学堂の西窓に懸けて戒めとした文章。後に西銘

と改称した。

○那波活所（文祿四年・一五九五～慶安元年・一六四八）…江戸

時代前期の儒者。名は方、初名は信吉、字は道円、通称は平

八。活所と号した。播磨国姫路の素封家に生まれ、慶長十六年

（一六一一）、上京して銅駝坊に居を構え、翌年藤原惺窩に入門。

林羅山・堀杏庵・松永尺五と並び、惺窩門の四天王と呼ばれた。

元和九年（一六二三）、肥後熊本藩主加藤忠広に仕えたが、寛永

七年（一六三〇）に致仕。加藤家改易の後、寛永十二年から紀州

和歌山藩主徳川頼宣に仕えた。寛永十九年、幕府から『寛永諸家

系図伝』編集を命じられ江戸に赴くが、眼疾のためこれを辞して

帰洛、京都銅駝坊の自宅で没した。活所と同じく紀州侯に仕えた

木庵は長子。また、のち徳島藩儒となった魯堂は次子草庵の曾孫

である。

三、野間三竹

三竹

寧靜戊寅歲

寧靜戊寅の歲

陽和滿素襟

陽和素襟に満つ

雲霞連嶽麗

雲霞嶽麗に連なり

雨雪細塵沈

雨雪細くして塵沈む

群樹自生意

群樹自ら生意あり

衆禽僉好音

衆禽僉音を好む

東軒難覓句

東軒句を覓め難し

清旦轉長吟

清旦轉た長吟す

○五言律詩（縦二三、八cm×横一三、〇cm）

○韻字：襟・沈・音・吟（下平声十二侵）

○『柳谷集』「五言律」の巻頭に「元旦」と題して収録。

○野間三竹（慶長十三年・一六〇八～延宝四年・一六七六）…江戸

時代前期の医家、儒者。名は成大、字は子苞、通称は三竹、靜軒、

柳谷、潜楼、白雲洞、寿昌院、北山人と号した。父の野間玄琢

につき医学を修め、寛永十三年（一六三六）に法橋、同十五年法

眼となる。寛永十七年、奥医として東福門院に附属し、以降江戸

へも隔年に仕出した。正保三年（一六四六）家督を相続。寛文八

年に法印となる。幼時から松永貞徳や尺五、林羅山に学び、医者

としての公務のかたわら、読書や著述に没頭した。

四、宇都宮遯庵

題東求堂

東求堂に題す

泉石膏肓無俗情

泉石の膏肓 俗情無し

東山投老結茶盟

東山老を投じて茶盟を結ぶ

舊來好事長為法

旧來の好事 長く法と為る

器物價高時代名

器物価高し 時代の名

宇遯菴

○七言絶句（縦二〇、四cm×横二七、八cm）

○韻字：情・盟・名（下平声八庚）

○『遯庵詩集』卷二に「題東求堂」と題して収録。なお、『遯庵詩集』

の題下注には「堂義政公煎茶処也（堂は義政公煎茶処也）」とあり、頸聯「舊來」は「一朝」に作る。

○東求堂：京都東山の慈照寺（銀閣寺）にある足利義政の持仏堂。

入母屋造、柿葺。南には仏間、東北には四畳半の書齋（同仁齋）がある。国宝。

○宇都宮遯庵（寛永十年・一六三三～宝永四年・一七〇七）：江戸

時代前期の儒者。諱は由的、字は三近、号は遯庵・頑拙。周防の人。父は岩国藩の奏者役宇都宮正記。慶安二年（一六四九）、藩

費を給せられて上京し、松永尺五に学ぶ。木下順庵・安東省庵とともに松永門の三庵と称せられ、京都で塾を開き門弟に教授し

た。その著『日本古今人物史』が幕府の忌諱にふれたため岩国に禁錮されたこともあったが、赦されると再び上京した。延宝六年

（一六七八）には岩国藩儒となり、元禄四年（一六九一）以後は岩国に戻って藩の文教に貢献した。

五、稻生若水

和大坂井狩善五元日韻

郢中詞客賦新正 郢中の詞客賦新正たり

装點東風寄帝城 装点東風帝城に寄す

萬頃晴光通曲閣 万頃晴光曲閣を通り

三朝曙色遶前榮 三朝曙色前榮を遶る

緑浮山岳烟霞動 緑浮山岳烟霞動き

潮起海門雲霧生 潮起海門雲霧生ず

偏見年芳入詩思 偏に年芳を見て詩思に入る

為君擲地試金聲 君が為擲地して金声を試む

稻若水

右、井狩善五郎、大坂新地二別荘ヲ置キ花木ヲ多植賞玩仕候者ニ而御座候。

○七言律詩（縦二二、七cm×横三二、一cm）

○韻字：正・城・榮・生・声（下平声八庚）

○擲地：地に抛つこと。「試みに地に擲てば、要するに金石の声を

作さん」（『世説新語』「文学」）。

○稻生若水（承応四年・一六五五～正徳五年・一七一五）：江戸時代前期～中期の本草学者。名は宣義、字は彰信、通称は正助。若

水と号した。江戸に生まれ、大坂に移る。儒を木下貞幹に、医を父の稻生恒軒と大坂の福山徳潤に学んだ。元禄六年、金沢藩主前

田綱紀に召し抱えられる。以後、京都にあつて研究を進めた。著

に『金沢草木録』、『食物伝信纂』、『本草綱目新校正』、『庶物類纂』

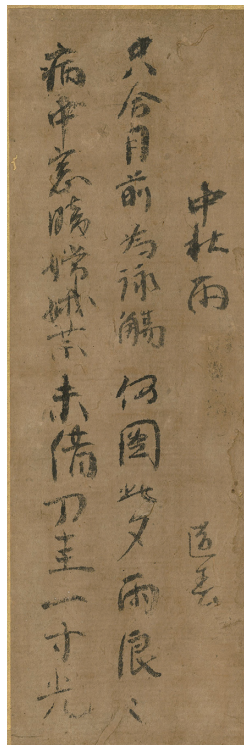
などがあり、門人に野呂元丈、丹羽正伯、松岡恕庵らがいる。

○井狩善五郎：井狩善五郎宛の稻生若水書簡が国会図書館（「稻生

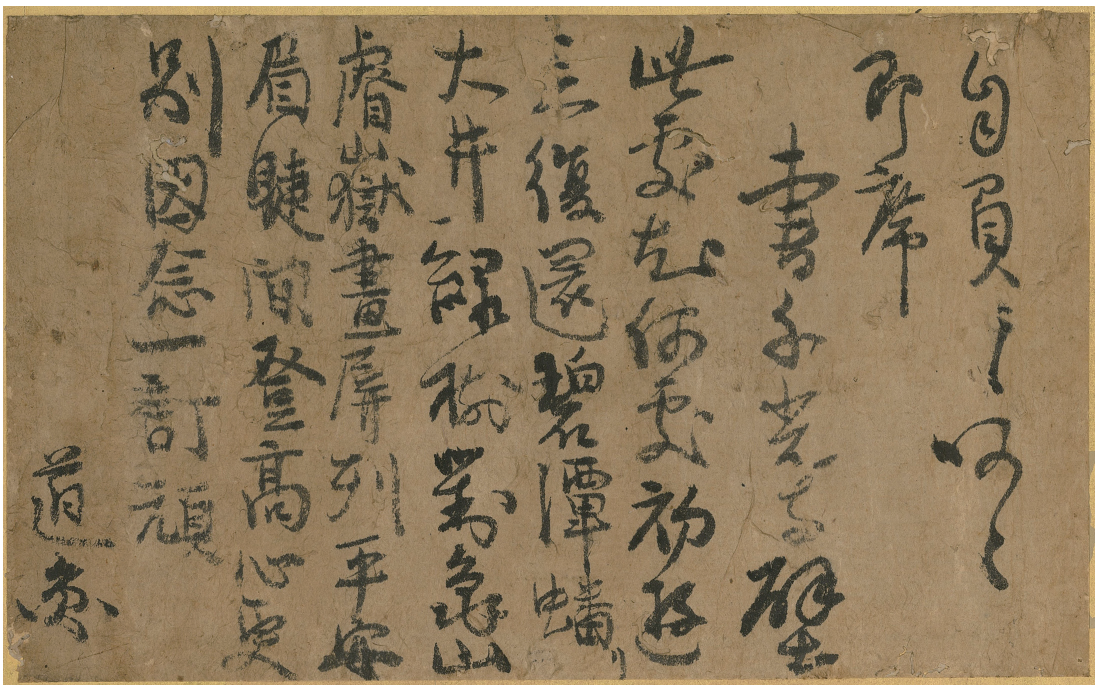
若水書簡」井狩善五郎宛、三月廿六日付）、公益財団法人武田科学振興財団杏雨文庫（「稻生若水書簡」井狩善五郎宛、「杏雨書屋所藏書簡集」一、参照）に所蔵される他、早稲田大学図書館が所蔵する井狩善五郎宛「藤井懶斎書簡」（三月廿六日付）中にも若水の名前が見える。

（参考図版）

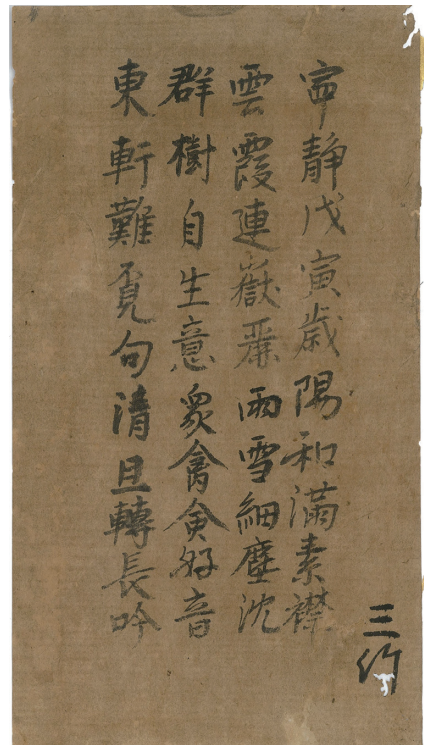
一、林羅山



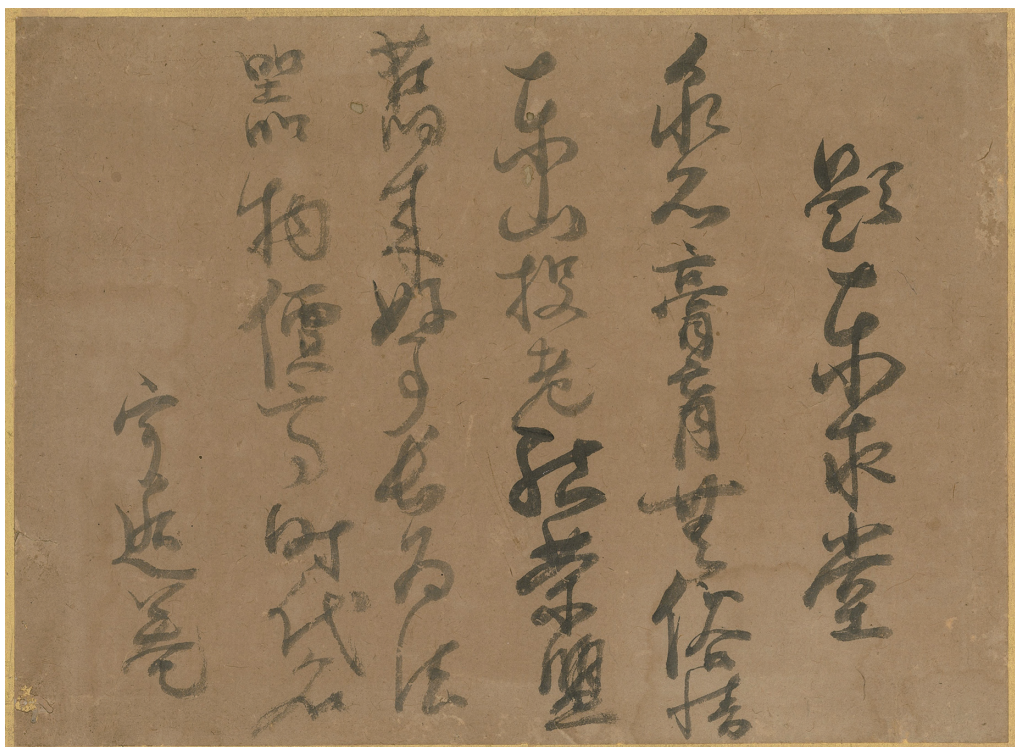
二、那波活所



三、野間三竹



四、宇都宮遜庵



大坂井符善五元日韻

郢中詞客賦新正
裝點東風寄帝城
萬頃晴光通曲閣
三朝曙色遶前榮
綠浮山岳烟霞動
潮起海門雲霧生
偏見年芳入詩思
為君擲地試金聲

稻生若水稿

大坂井符善五元日韻
別荘ツ置
本ツ
多極堂既作
云々々々